The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	更級日記の源氏物語受容の一面
Author(s)	深沢, 三千男
Citation	語文. 1987, 48, p. 26-31
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68755
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

更級日記の源氏物語受容の一面

——東山滞在記後における「春まで命あらば」の位置づけを中心に、潜流する文脈——

深沢三千男

(1) あづまぢのみちのはてよりも、猶おくつかたにおいゝでたる人、いか許かはあやしかりけむを、……続けて物語、なかんずく源氏物語憧憬記から旅の記へ。

だれでも知っている更級日記冒頭であるが、「あづま」とは、著者のみならず、浮舟が育った所でもあり、しかも著者の源氏物語憧憬の核は、ほかならぬ浮舟憧憬だったのであり、①「あづま」は、ほかならぬその指標だったというべきである。そして上京した著者は翌年、久しく待望の源氏物語全巻揃いを贈られる。

(2) 治安元年、著者十四歳晩春ないし初夏——(「きさきのくらひもなにゝかはせむ」とばかり、源氏物語を耽読し、「法華経五巻をとくならへ」との夢告をものともせず)物がたりの事をのみ心にしめて、「われはこのごろわろきぞかし。さかりにならば、かたちもかぎりなくよく、かみもいみじくながくなりなむ。ひかるの源氏のゆふがほ、宇治の大将のうき舟の女ぎみのやうにこそあらめ」と思ける心、まづいとはかなくあさまし。

ここで源氏物語の多くの女人たちの中で、夕顔と浮舟の名が挙げられているゆえんは、一介の受領の女に過ぎない著者にとっての、階層・境遇上の親近感ないし可能性もさる事ながら、薄幸の美女の悲しい恋物語への強烈な憧憬と、その不可欠の前提としての、変身願望を表明しているのではないだろうか。なぜなら、源氏に匹敵するような貴顕のアイドルとの、身分違いの恋が、仮りに夕顔や浮舟のような形で、階級的・境遇的に実現可能であったとしても、容姿の面でも実現可能でなければ、どっち道現実性がないからである。回想時の感想と思われる「まづいと」以下の、おのがかつての迷妄を跡づける文言も、そのような観点で受け取るべきものであろう。先取り的に言えば、結局は悲惨なそして美しい女人悲劇から遠く、索漠たる平凡な不運に終ってしまった彼女の人生、ドラマティックないしトラジックに踏みはずす事のできなかった、平凡でしかあり得なかった、しらけた人生=身の程相応の平均値的女性に終ってしまった事への、永遠の愚痴こそ、更級日記の核心部分として、後世の読者の読まされつつあるものなのではないか。

(3) 治安三年、著者十六歳夏——そのかへる年、四月の夜中ばかりに、火のことありて、大納言(藤行成)殿のひめぎみ(の生まれ変わり)と思かしづきしねこもやけぬ。

(4) 同期——(焼け出されて転居した先は)たとしへなくせばき所の、庭のほどもなく、木などもなきに、いと心うきに……

ところで著者一家は、都の自宅焼亡という災厄に遭遇して、わびしい仮住居、さらには(8)で東山の言わば〈山里〉に移らざるを得ないはめになる。ここで連想されるのは、浮舟の実父宇治八宮の不運である。

(5) なまじ東宮時代の冷泉院の廃太子隠謀に、弘徽殿方にかつぎ出されかけたばかりに、光源氏専権時代孤立無援に陥った八宮が、この世を見限って道心を強める一方であった時――かかる程に、住みたまふ宮焼けにけり。いとどしき（不運に不運が重なるばかりの）世に、あさましうあへなくて、移らひ住みたまふべき所の、よろしきもなかりければ、宇治といふ所によしある山里持たまへりけるに、渡りたまふ。【橋姫】

ただでさえこの世的には絶望的に未来を閉じられ、窮迫しつつあった八宮が、不運な災厄で都の宮邸を焼け出されて、他に宮家の格式・体面維持にふさわしい移り先を用意できず、由緒ある名邸の誉れ高くはあるが、〈山里〉といわれる宇治の別邸に移らざるを得なかった事で、宇治八宮家と〈山里〉ののっぴきならぬ結びつきが、明らかになるくだりである。このほか宇治川のほとりの八宮邸や、のちに入水未遂後の浮舟の隠れ住む小野の山里を、「山ざと」と呼ぶ例は、枚挙の必要もない位頻出する事になる。著者一家のいずれ移る事になる東山の住居も、〈山里〉たる実質を備えている事になろう〔(8)参照〕。そういう事になると、

(6) 万寿元＝治安四年、著者十七歳？――その五月のついたちに、あねなる人、こうみてなくなりぬ。

とある姉死亡も、どこか宇治大君の死と深層的連想でつながる事になりそうである。かくして著者はますます宇治八宮家物語の〈回路〉にはまり込む事になったかに見える。

(7) その（姉喪中の）ほどすぎて、しぞくなる人の許より、（故人の強い依頼で捜していた）『かばねたづぬる宮』といふ物がたりをゝこせたり。まことにぞあはれなるや。

『かばねたづぬる宮』は散佚物語なので、その内容は断片的資料で知るほかないようであるが、男主人公は匂宮と同じく三のみこであり、死んだ女が罪深きさまに見えて、かばねが見つからなかったように思われる点、浮舟行方不明後の状況に似るようであり、成立時期について、源氏物語との先後関係はわからないが、何かすれ合うものが感じられるのだが。それはともかくとして内容的には、明らかにこれまた宇治八宮家物語の圏内のでき事であった。

(8) 万寿二年、著者十八歳？――四月つごもりがた、さるべきゆへありて、東山なる所へうつろふ。

(5)ですでに触れたが、著者一家がここで移居したのは、まさに〈山里〉そのものである。かくして著者一家の東山滞在は、内的意識の流れ＝深層の文脈では、自身の東国流寓、そして源氏物語の女人たち（なかんずく浮舟）の、さすらいのおさらい＝追体験ではなかったのであろうか。このあたりから著者は無意識的に潜流する宇治八宮家、なかんずく浮舟物語の文脈の〈水路〉にはまり込み始めたのではなかろうか。順順のでき事は偶然であっても、そこに自ら形成さざて行く無意識的関係づけ――深層の文脈が、著者の意識の流れをいや応なしにコントロールしてしまう過程が、明らかになって行くように思われる。

(9) 夕顔頓死後、源氏は守秘のため自分のもとに抑留した右近から、夕顔の素性を聞く――（頭中将が見そめて）三年ばかりは心

ざしあるさまに通ひたまひしを、去年の秋ごろ、かの右の大殿（弘徽殿・頭中将本妻の父）よりいと恐ろしきことの聞こえまで来しに、もの怖じをわりなくしたまひし御心に、せん方なく思し怖じて、西の京に御乳母の住みはべる所になむ、這ひ隠れたまへりし。それもいと見苦しきに住みわびたまひて、山里に移ろひなんと思したりしを、【夕顔】

浮舟と相並んで、著者憧れの夕顔も、一旦は西とはいえ、山里暮らしを目ざした事は見のがせないだろう。夕顔に関しても、浮舟と同じく〈山里〉につながれて行く事は無視できまい。なお夕顔葬送の地はいうまでもなく東山であった。著者一家が夕顔ゆかりの場所に暮らし事が、何らかの影を著者の内面に投げかけていないとは言えまい。

(10) 約五箇月の東山滞在後、稲田の刈入れも済んだ頃、帰京後——十月つごもりがたに、（旧仮寓に）あからさまにきて見れば、……（自分たち一家ばかりか）水さへぞすみたえにけるこのはちるあらしの山の心ぼそさに　そこなる（もしかすると東山での滞在先の？——秋山虔氏御注④）尼に、「春までいのちあらばかならずこむ。花ざかりはまづゝげよ」などいひてかへりにしを、年かへりて、（万寿三年？）三月十余日になるまでをともせねば、……ちなみに浮舟の失踪は春。

ここでの尼にはひょっとすると、夕顔の亡骸を引受けて弔った、東山辺の惟光旧知の尼や、入水未遂後の浮舟を保護した、小野の尼たちの連想が働いているのかも知れない。もしそうだとすると、以下の事もより滑らかに理解できる事になるだろう。ここでは自分でパセティックになって、すぐに死ぬ可能性などを口走りたがる、メランコリックさが窺われ、ざでわざとらしく、少少いや味ですらあるのだが（尼からの反応がなかった事も、さこそとうなずける、この発言に対して、尼は余程辟易してしまったのだろう）、ここはそうした事が、自然の移ろいに触発された、単なる過度の感傷癖で割切られるのは不自然であり、やはり夕顔や浮舟の事が頭に潜むからなのではなかろうか。尼のイメージに触発され、また八宮家の零落、落魄にわが家を引き比べる意識下の無意識の作用もあり、潜流する文脈の噴出が、つい浮舟（さらに夕顔のイメージも添うか？）の悲しい運命への連想から、このような演技過剰なせりふを、ついロ走らせてしまったのではなかろうか。そしてそうした事をもたらした、東山滞在記とその前後の表現構造がやはり注目されよう。流寓の源氏物語の女人に、このように強く共感する無意識的内面は、まさに源氏物語がのり移ったようで、言わば源氏物語中毒の症状にもたとえられようか。

(11) 年月不明——かやうに、そこはか（と脱？）なきことを思つゞくるをやくにて、物まうでをわづかにしても、はか〳〵しく、人のやうならむともねむぜられず。このごろ世の人は、十七、八よりこそ経よみ、をこなひもすれ、さること思かけられず、からうじて思よることは、「いみじくやむごとなく、かたちありさま、物がたりにあるひかろ源氏などのやうにおはせむ人を、年にひとたびにてもかよはしたてまつりて、うき舟の女君のやうに、山ざとにかくしすへられて、花、紅梅、月、雪をながめて、いと心ぼそげにて、めでたからむ御ふみなどを、時〳〵まち見などこそせめ」とばかり思つゞけ、あらまし事にもおぼえけり。

記事の位置としては、(10)とわずかに隔たる位置にあるが、時間的

にはどれだけ隔たっているかわからない。ここでは「かやうに」は、その直前の継母上総大輔の離婚後の、宮仕え先での召し名に、クレームをつける記事を受けるものとしては不自然で、次に全く続かず、表面上は余りにも唐突で、これまでの何を受けているのか、余りにも曖昧で漠然として、その点更級日記の全用例の中で珍しい用例であり、その点木村正中氏の御指摘のように、記事寄せ集め編集の際のつなぎことば、ないし原記事にあったつなぎことばの残存とも考えられるのであるが[5]、たといそうであるにしても、これを挿入し、ないし削除しなかった意識ないし無意識そのものが、やはり問題とされるに価するのではなかろうか。そうとすると、これは以上東山滞在記前後の、長い無意識的に潜流する文脈を受けるものとして、十分な必然性があり、源氏物語への思い入れが浮上し、表面化するもので、必ずしも分裂、破綻の指標ではなく、底流する文脈の噴出口ともいうべきものであろう。そもそも完全な意識的構造体では深い文学とは言えず、見えざる統合原理、内的論理こそ見出されねばならぬと思われる。その点ここは叙述の流れ‖表現構造上注目すべき源氏物語、特に浮舟熱愛の告白の記事の位置としては、潜流して、表現の表層を動かして来た文脈の、あからさまな浮上として注目され、納得できる位置と言ってよいであろう。ここでも〈山里〉は悲恋の運命の指標となっているようである。著者旧住の〈山里〉再訪に際して、悲惨な女人の運命にわが身を託する思い入れを、思わず口走ったゆえんである。

それにしても著者の願いはユニークでもあり、クレイジーである。「年にひとたびにてもかよはしたてまつりて……」とは、日かげの女こそわが望みと言わんばかり、きわめてパセチックで、また情欲のもだえ知らぬ、いかにも処女らしい空想でもある。若き日の著者にとっては、現実との妥協による身の程に釣り合った幸福、ぬるま湯に浸ったような無難平凡陳腐な人生など願い下げで、美しく悲しくさびしい恋――鮮烈な悲恋をこそ生きたかった、物語の世界にどっぷり浸った、強烈なローマン精神[6]がここでは回想されているのであり、その前提として不可欠の美女への変身願望が語られているのも悲しい。これは著者自らも言う通り、まことに愚かしくも悲現実的な夢だったというべきである。

(12) 長元五年二月、著者二五歳――おや脱落アルカ？なりなば、なき事をうち思すぐすに、おや、からうじて、はるかにとをきあづま（の国司）になりて、「年ごろは、『いつしか思やうにちかき所になりたらば、まづむねあく許かしづきたてゝ、ゐてくだりて、海‖山のけしきも見せ、それをばさる物にて、わが身よりもたかうもてなしかしづきて見む』とこそおもひつれ、我も人（著者）もすくせのつたなかりければ、あり〳〵て、かくはるかなるくに（の国司）ゝなりにたり。

(13) 北山の好景にしきりに感嘆する光源氏に、供人いわく――「これはいと浅くはべり。人の国などにはべる海‖山のありさまなどを御覧ぜさせてはべらば、いかに（源氏の）御絵いみじうまさらせたまはむ」……良清いわく――「近き所には、播磨の明石の浦こそなほことにはべれ。……かの国の前の守、新発意のむすめ（明石女君）かしづきたる家、いといたしかし。……」【若紫】

ここで(13)と比較して見ればわかるように、(12)の孝標の思念には、異常な娘かしずきをした明石入道の事が、念頭に浮かべられており、

その影響があると見てよいであろう。[7] ここでは近国の国司得分のメリットを生かした、巨富による婿かしずきのメリットへの期待から、貴顕の求婚者をおびき寄せられるとの、多分に現実化された著者の夢を打ちくだくように、父は遥かな遠国の国司になってしまって、今さらどうしようもない愚痴をこぼすのだが、その内容は木村氏の御指摘のように、不思議と明石入道の事を頭に置いたものとなっているようだ。そして(12)にさらに引続く部分(14)の述懐は、これまた不思議と(15)に引く玉葛上京前の、乳母の夫前少式の無念の遺言を中心とする状況に似る。

(14) (孝標女が)おさなかりし時、あづまのくにゝゐてくだりてだに、心地もいさゝかあしければ、これをや、このくにゝ見すてゝ、まどはむとすらむと思ふ。(タトエバ大夫監ノヨウナ者ガ現ワレタリシテ?)人のくにのおそろしきにつけても、(娘ナド伴ワズ)わが身ひとつならば、やすらかならましを、ところせうひきぐして、いはまほしきこともえいはず、せまほしきこともえせずなどあるが、わびしうもあるかなと心をくだきしに、いまはまいておとなになりにたる(娘)を、ゐてくだりて、わがいのちもしらず、京のうちにてさすらへむはれいのこと、あづまのくに、ゐなかびとになりてまどはむ、いみじかるべし。……」――そして父は永訣覚悟で老軀をひっさげて、常陸に単身赴任する事になる。

(15) (玉葛の乳母の夫)少弐、任はてて上りなむとするに、遥けきほどに、ことなる勢ひなき人はたゆたひつつ、すがすがしくも出で立たぬほどに、重き病ひして、死なむとする心地にも、この君(玉葛)の十ばかりにもなりたまへるさまの、ゆゆしきまでをかしげなるを見たてまつりて、「我さへうち棄てたてまつりて、いかなるさまにはふれたまはむとすらん。あやしき所に生ひ出でたまふも、かたじけなく思ひきこゆれど。何時しかも京に率てたてまつりて、さるべき人にも知らせたてまつりて、御宿世にまかせて見たてまつらむにも、都は広き所なれば、いと心やすかるべしと、思ひいそぎつるを、ここながら命たへずなりぬること」と、うしめたがる。【玉鬘】――そして案の定故前少弐の懸念通り、暴猛粗野な在地土豪大夫監の、執拗な追求に脅やかされる事になる。

(14)で表明されているように、任地で身を縮めるようにして、小さくなっていなければならぬ、心弱い国司の不自由な立場と、地方にとぐろを巻く猛悪な国人衆への脅え、無常の世のならいとて、客死もありかねず、その場合年頃の娘を、縁者もなく、生活環境としてもなじめない地方に、さすらわせる事への強い不安など、父孝標の述懐はまさしく、玉葛の保護者少弐の直面した絶望的状況の軌跡を、可能態として辿り直している感がある。(12)の場合と併せて、善良で優しい父の愚痴たるにふさわしく、その内容から、父もまた典型的に物語に人生を学んだ一人だった感があり、ひょっとすると父までもが、愛娘の物語マニアに感染していたのだったのかも知れない。ただ山里の日かげの隠し女を夢見るなどといった、現実の幸福を無視した、いささか中毒症状めいた不健全な願いにかぶれていた娘に比して、父親の立場としては、現実の幸福を夢見るのは当然の事で、同じロマンティシズムのレベルで見られるにしても、娘の方の願いの頽廃性は明らかだったと思われる。その面での討論が父親の問であった事も考えられ、娘も父親のより現実的な考え方(とはいうも

のの、まだまだ非現実的レベルではあるが）に、ある程度歩み寄っていたであろう事は、⑿の著者の思いで明らかである。ただ著者自身の憧れの対象として、境遇的な面で夕顔、浮舟同様に近いのに、あえて明石女君、玉葛が著者によって挙げられなかったところに、著者の本音が覗いていたというべきであろう。夕顔や浮舟への憧憬が、単に階層や境遇面での親近感や、実現性にあったという事では説明がつかない。著者の根底には強烈な悲劇への志向があったと見るべきである。その唐突さで問題の「春まで命あらば」の発言も、以上のような文脈の潜流の噴出口として理解すれば、より一層納得の行くものとなるであろうし、それは編集作業による資料の、取捨選択排列という過程を想定し、計算に入れても、変りはないと思われる。

ともかく孝標女は更級日記の中で、いや応なく源氏物語の重いくさりをひきずって、歩まされていたと見るべきであろう。それにしても、日記文学なるものの謎、わからなさは、そこに跡づけられる主題性ないし〈文脈〉が、表現のレベルのものか、内容のレベルのものか、果たしてどちらなのかという事であり、ひょっとすると日記以前の行動すらが、意識的ないし無意識的に、表現を引きずって歩いている面も、考えられるのではないかという事である。つまり人生に一貫する主題性ないし文脈が発見される事によって、日記文学の主題性が発見され、展開されるのか、主題性に向かい、ないしは即する人生運営がなされる事によって、日記文学が生み出されるのか、換言すれば文学が事実をまね、かたどっているのか、逆に事実が文学をまね、かたどっているのか、どこか割切れない面がつきまとう上に、一般論的に完全な意識構造体では、深い文学とは言えないであろう。とすると文学構造の中に、見えざる内的論理、統合原理こそ、見出だされなければならない事になるであろう。

付記――この小論が昭和六一年五月の中古文学会春季大会において発表の運びとなり、予告された段階より、全く予期していなかった程の大反響を受け、各方面からの過分の御激励、御援助相次ぎ、鶴見大学における発表の席上でも、拙論をより説得的なものに強化できる、貴重な御指摘を賜わった。以上の過程での各位の御好意に厚く御礼申上げる。なかんずく寺本直彦氏、木村正中氏の御厚情に深謝し、以上のような多大の御期待にそむいて、この小論が取るに足りない凡論貧稿に終った事を、深くおわび申上げる次第である。

（注）

① 犬養兼氏「更級日記の虚構性」国文学昭44・5月。

② 寺本直彦氏「更級日記『宇治の渡り』の段試解」青山語文第十六号、昭61・3月。

③ 松尾聡氏『平安時代物語の研究』昭30・6月。

④ 『新潮日本古典集成』昭55・7月刊。

⑤ 中古文学会大会会場でのロ頭御指摘、昭61・5月。

⑥ 孝標女の夕顔・浮舟思慕を、ローマン精神の発露として位置づけられた方に、すでに西田禎之氏がおられるのだが、氏は余韻を残す未完結の愛に共感する、言わば前向きの指向性を認めておられる点、私のように言わば物語の毒性に感染して、未来への展望の開けない悲恋を恋し、悲惨な運命をこそ指向する、不健全なローマン精神を汲み取る立場とは、異質的なもののように思われるので、拙考の支えとさせて頂くには至らなかった事を、氏のなみなみならぬ御好意にもかかわらず、あえて明らかにさせて頂く次第である。西田禎之氏「夕顔思慕をめぐって」昭47・11月初出、『更級日記研究序説』所収参照。

⑦ 木村正中氏「受領の女、明石の君」『講座源氏物語の世界　第三集』昭56・2月、『『更級日記』における『源氏物語』の享受』『『源氏物語』とその受容』昭59・9月刊。